

天の岩屋戸の神話（一）

——高天原の〈祭式〉と〈祭神〉をめぐって——

阿部 寛子

一 はじめに

スサノヲの荒ぶるわざに怒り岩屋戸に隠れた天照大神が、八百万の神々によってとり行われる大がかりな祭りによって再び出現する話は、さまざまな神話の要素を含み、その解釈も多様である。その神話の原義としては日蝕神話とする説が根強いが、新嘗祭の神話的表現とする松村武雄氏らの説もある。⁽¹⁾しかし近年では、スサノヲと天照大神との葛藤を物語る展開のなかで、それは太陽神天照大神の死と再生であり、鎮魂祭の起源神話とみなす読みが一般的になってきた。西郷信綱氏によれば、スサノヲの荒ぶるわざがもたらした混沌と危機が、すべての神々をまきこむ大がかりな祭りと計略とによってようやく乗りこえられ、ここに宇宙的・社会的秩序が回復し、「この再生をおして天照大神は始めて名義どおり天照大神に、つまり高天原の至上神になり、さらにいえば天空に輝く太陽神として誕生した」ことになる。⁽²⁾

一方、この岩屋戸前の祭りを神楽の源流となるべき「鎮魂」の起源を語るものとみて、そこに悪霊祓の神話という新たな視点を導入し、積極的な発言を展開しつつあるのが齊藤英喜氏らである。この齊藤説は民間神楽研究者、岩田勝氏の「神楽源流考」に触発されたものであるというが、その岩田氏は次のようにいう。

(石窟前の祭儀は) 祭儀の庭に祟りを顕わさないように地霊をいわずめ、他界から侵入して、忌み籠もる神的存在にとりかかってけがれを生じさせないように悪霊をはらうことを意図する祭儀であった。それによってはじめて新嘗(大嘗)の大儀を迎えることができ、司祭者としての天皇がたしかかな形でクニの共同体の神と交融することができるようになるのであった。天石窟の前における祭儀は、一言もって尽くせば、そのための悪霊強制の祭儀なのであった。⁽³⁾

この、スサノヲノ命をめぐる「悪霊強制」説をうけた齊藤英喜氏は、天照大神の祟り神としての側面を強調し、石窟から「手力雄神によって、暴力的に引っ張りだされる天照大神は強制的に石窟から外へと攘却された」ものであるとし、岩戸神話の「鎮魂」を悪霊の攘却・鎮送と読むのである。⁽⁴⁾

しかしながら、古事記で述べられている、天地初発から神がみの誕生、そしてこの天照大神とスサノヲの対立という文脈のなかでこの神話を読み解くならば、この場合の「鎮魂」とは、やはり、衰弱した太陽神を再生・復活させることの象徴と理解すべきだと思えてくる。ただ、本稿の意図は、そうした従前の説に対して、古事記の文脈におけるこの段の祭式的な読みを試みるところにある。すなわち、この岩屋戸前の祭儀を高天原における始めての祭式と考えるなら、その祭祀の主体はいずれの〈神〉であったのか、その〈神〉の位相を考えることが、この段を読み解く際の大きな鍵のひとつであると思うからである。

以下は、高天原におけるこの祭式を、神話の文脈のなかで読み解く、一つの試みでもある。

二 高天原の祭式

この神事の位相を、「呪術的観念と宗教的観念の混交」したものとみる土橋氏の見解があるように、呪術か宗教かの問題についてまず確認しておきたい。すなわち、呪術なら、隠れた日神、天照大神への働きかけとしての呪術の意味が考えられるべきだが、宗教としての神事なら、それは祈願の対象としての神の存在が問題となるからだ。氏もいわれると

おり、この神事には「呪術的観念と宗教的観念の混交」したものがみられ、宇受売の神がかりが「復活につながる」という共通理解はあるはずだから、広義にはまさに呪術である」とする工藤隆氏の見解もある。しかし、この神話に「直接人々に訴えかける熱狂・興奮の要素をもっている点」を見のがさず、そこに劇的世界へつながるタマフリの原点をみようとするのが氏の特色にもなっている。⁽⁶⁾

そうした呪術的要素を認めながらも、一方、

① 天児屋命による「ふと詔戸言壽^はき白して」と、祝詞奏上があること

② 宇受売の「神懸かり」という表現があること

などに注目したい。右の二つの要素は、やはり八百万の神々による高天原の祭式を表したものとして重要であろう。スサノヲの暴虐によってもたらされた太陽神の岩戸隠れという異常事態を回復するために、高天原では、初めての祭式がとり行われることになったのだ。そのことを確認して以下、順次問題点を考えていくこととする。

高天原で初めてとり行われる祭式、ということになると、いわゆる祭祀の対象としての〈神〉の存在が問われることにはならないだろうか。天照大神も、神がかりの宇受売もその他の八百万の神々も、いわば高天原における並立的存在としての神々である。その神々が、祈る対象としての〈神〉とは、実は別次元の〈神〉ではなかっただろうか。

従来この件に関しては、岩屋戸に隠れた天照大神を招ぎ迎える儀礼として、天照大神自身が祝詞奏上の対象とされてきた。しかし、それは、後の宇受売の神がかりのことと一対で考えられるべきことで、宇受売にかかった神を、果して天照大神とみなしてよいのだろうか。その点については、後述するが、まずはこの段の主役としての天照大神について問うことから始めよう。

天照大神とは、古事記の文脈のなかでどのように位置づけるべきなのか。

- (1) (スサノヲの命は、誓約^{ちかひ}に勝った喜びのあまり)……勝ちさびに、天照大神の宮田の阿を離ち、その溝を埋め、また其の大嘗を聞しめす殿に糞まり散らしき。……

(2) 天照大御神、忌服屋に坐して、神御衣織らしめたまひし時、その服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて、おとしいるる時、天の服織女見驚きて、梭にほとを衝きて死にき

とあるように、天照大神には高天原における大嘗祭の主催者としての側面があることがわかる。一方、書紀においても

A 是に共に日神を生みたまふ。大日靈貴おほひるめのむちと号す。此の子光華ひかりうるは明彩しく、六合の内に照り徹る。

(第五段)

B (スサノヲノ命) 天照大神の新嘗こしめすきこしめす時をみて、則ち陰に新宮に放戻る。又天照大神の方に神衣を織りて、齋服殿にましますをみて――

(第七段)

とあって、天照大神は、日神であるとともに、新嘗の主宰神であるとみなされる。古事記にある「大嘗」とは、古代においては新嘗と同類のものと考えてよいから、新嘗の主宰神としての天照大神は記紀共に通じる像であることは確かだ。新嘗祭とは、新穀を神に供えるとともに自らも食す収穫祭であるとするなら、この高天原の祭儀において、新穀をささげるべき、天照大神にとっての〈神〉とは、何か。

右に、オオヒルメノムチと書紀にあるように、「ヒルメ」が太陽神の妻、すなわち巫女をいうものとなると、やはり天照大神が奉仕する〈神〉がいたと考えられることになる。高天原の神事において、天照大神が奉仕する神の問題は、当然、すでに述べた高天原における祭式の主体である神の問題につながってくる。その点を、西郷氏は、「天照大神の二重性という解釈で、「神御衣を織るのがヒルメの姿だとすれば」、「大嘗こしめすのは高天原の至上神として」の天照大神であると理解している。⁽⁷⁾

高天原とは、ひとつのパンテオンである。天照大神を中心として、八百万の神々が居並ぶ、一つの世界である。そこでの、例えば「新嘗」の神事において「新穀」を共食する〈神〉の存在、あるいは当面の太陽神復活の祭式において靈魂を活性化するために、祈る対象としての〈神〉の存在、さらには宇受売によりつく〈神〉の存在は、八百万の神々と

は別次元の神の存在が考えられねばならないだろう。

その神の名が明らかにされていないため、祝詞奏上の対象が天照大神と考えられたり、スサノヲが宇受売にかかったとする悪霊払いの神話という解釈を生んでもいるわけだが、次に展開するウズメの神がかりを神話の文脈のなかで読む限り、そうした解釈が成り立つとは思われない。

(3) 是に天照大御神畏みて、天の石屋戸を開きてさしこもり坐しき。……是をもちて八百万の神、天の安河原に神集ひ集ひて、高御産巢日神の子、思金神に思はしめて……

(4) 布刀玉命ふと御幣ととり持ちて、天兒屋命ふと詔戸言ほき白して……天宇受売命……うけを伏せて踏みとどろし、神懸りして、

(5) ここに天の宇受売白言さく、「汝が命にまして貴き神坐すが故に、歡喜び咲ひ樂ぶ」

(5)は、天照大神に答えた宇受売の言葉であるが、これは、神がかりした状態での発語と理解すべきであろう。宇受売は、天照大神に対して「汝が命にまして貴き神坐す」という。これは、次に展開される、鏡に写った天照大神自身をさすものではない。確かに、高天原においては「至上神」としてあるとも考えられるが、祭りの場での祈りとは、日常的にはその存在を顕さない、高天原にその姿を見せない存在体としての幽界における〈神〉への働きかけの行為ではなかったか。祈り、そして〈神〉を迎え、その力によって天照大神を出現・再生させようとするのが、この祭儀の目的ではなかっただろうか。

スサノヲの暴力によって天照大神は石窟に「さし籠もる」が、八百万の神がその神を出現させるすべを求めてわざを競うことになる。まずもとめられたのが

高御産巢日神の子、思兼神に「令_レ思而、……」

とあるように、「思慮の神」である思兼神の「知恵」であった。この神が「思慮」したことは、祭儀の方法そのものであろう。まず思兼神が登場させられたのも、それが高天原における初めての祭儀であり、未だ祭式の方法が確立されていなかったからだ。この祭式が、いわば祭式の起源となるものでもあったのだ。

ところで、この思兼神がいまだ姿を見せない「高御産巢日神」の「子」とされているのは、なぜなのだろうか。

三 高御産巢日神

ここで、古事記における高天原パネテオンを確認しておこう。

天地初めて発けし時、高天原に成れる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。此の三柱神は、みな独神と成りまして、身を隠したまひき。

高天原に最初に成った神は、天之御中主神・高御産巢日神・神産巢日神という単独神であり、その三神は「隠身」の神であったという。金井清一氏によれば「神がみの顕現している世界から退いて、幽界において存在すること——神がみの世界に対して姿をみせずにいること」となり、天照大神および他の八百万の神々と並ぶ神ではなく、高天原にも姿をみせない、神ということになる。

天之御中主神は書紀の一書および『古語拾遺』に出てくるのみで、ほとんど働きをしていないが、それは一種の論理的な要請にもとづいて考え出された神であるからなのかもしれない。⁽⁸⁾一方、他の二神は「ムスビ二神」ともいわれるが、神産巢日神は出雲系の神話に神産巢日御祖命という名で三度登場し、そのなかには、八十神に殺されたオホナムヂをこの神の力によって、母親神が、再生させる話がある。すなわち復活・再生にかかわる神でもあった。他の一神、高御産

巢日神といえ、後に天照大神と共に指令を発する神として登場し、重要な働きをする存在であって、その意味は重い。「ムスヒ」の神といえ、神野志隆光氏に詳しい考察があるように、⁽¹⁰⁾ 広く生成をいう他動詞（ウ）ムスと靈力をあらわすことからなるものとして、ムスヒの名義を理解するならば、それは万物を生成する根源的エネルギーの謂であることになり、ムスヒの神とは、「万物を生成する根源的エネルギー」の神格化ということになる。

この「生成」の神、高御産巢日神はのちに高木神と名をかえ（古事記には別名とある）、天照大神と並ぶ一対の神として、重要な指令を発していくのである。

① 高御産巢日の神・天照大御神の命もちて、天の安の河原に、八百万の神を神集へに集へて、思金の神に思はしめて詔らししく……」
（葦原中国の言向けの段）

② 天照大御神・高木の神の命もちて、太子正勝吾勝勝速日天の忍穗耳の命に詔らししく
（天孫降臨の段）

③ 天照大御神・高木の神の命もちて、天の宇受売の神に詔らししく「汝は手弱女人にあれども……」
（同右）

この二神一対の存在についてはどのように考えたらよいのだろう。

書紀、神武即位前紀九月には、周知のように神武の神祭りが伝えられ、そこで高御産巢日神が祀られていることが伝えられる。

C ……今高皇産靈尊を以て、朕親ら顕斎をなさむ。汝（道臣のこと）を用て斎主として授くるに嚴媛の号を以てせむ。……

とあるように、それは神武が高皇産霊尊として現れる祭りであり、新嘗の祭りかともいわれているものである。この神武の祀りは、祀るものから祀られるものへの転換でもあって、この時、道臣は「齋主」として「嚴姫」という存在になるが、これは天照大神の位置に相当するともいわれている⁽¹¹⁾。

この祀るものと祀られるものとの関係を、高木神と天照大神に置き換えてみると、「祀られる神と齋つく神」という二神一対の在り方がわかってくる。つまり、高天原において「嚴姫」としての天照大神が「齋く」神とは、高御産巢日神ではなかったか。神武が高皇産霊尊として現れたように、天照大神も高御産巢日神として現れ得たのではなかったか。それが二神一対として神話的に表現されたのだと思われる。

次に③について。天のヤチマタで異形の神サルタヒコに立ち向かう宇受売は、古事記においては「天照大御神・高木の神の命もちて」とあるように、この天つ神の言葉をとりつぐ存在としてあらわれる。それは、宇受売もまた二神を「齋く」存在であったことを物語る。天照大神が高御産巢日神を「齋く」なら、その天照大神の位相と置換可能なのが巫女神としての宇受売であつただろう。天つ神の言葉をとりつぐ巫女神は、神がかりをする巫女神でもあるはずで、宇受売の神がかりのあとに展開される天照大神との問答は、本来、天照大神が祀るべき高御産巢日神を、岩屋戸に隠れた大神に代わって宇受売が祀り、自身が高御産巢日神となっていることを証するものである。宇受売の活躍は、この祭式の中心ともいえる大きな問題を含んでいるため改めて別稿で詳述することにする。

ここで再び、思兼神のことに触れておきたい。この神が高御産巢日神の「子」として伝えられている理由である。思兼神の背後にこの神の存在があることは確かであるが、「隠り身」としての高御産巢日神の祭り方をよく知っている者としての「思慮の神」の存在が「子」という結縁の在り方で表現されているのではないだろうか。

高天原で最初にとり行われた祭式とは、この「隠身」としての神への祈りであり、そこでの「ムスヒ」の神の生成の呪力こそ天照大神を復活・再生させた根源であつたと考えられていたのではないだろうか。

この高御産巢日神は古い形の伝承と結びついているとして、古くは大王家の祖神としての位置にあつたともいわれ、岡田精司氏は、天岩戸の物語はヒルメとしての天照大神の神話ではなく、本来は高御産巢日神に伴った神話であり、こ

の神話の原型は、荒ぶる神の暴行によって日の神ニタカミムスヒに奉仕する斎田や機殿が荒され、奉仕の巫女ニヒルメが殺されたので日神が怒り、この世を暗闇にした——と考⁽¹²⁾えている。しかし、今はその古層のありかたを辿ろうというのではなく、現古事記の論理的読みの問題として、高御産巢日神はもっと注目されるべき存在であると、私には思われる。

四 ムスヒの神と鎮魂祭

天照大神を招ぎ迎えるための高天原の祭儀とは、やはり宮廷祭式としての鎮魂祭と対応するものがあるに違いない。その祈願の対象が、「ムスヒ」の神の生成力であったろうことを右に述べてきたわけだが、宮廷鎮魂祭においても「ムスヒ」の神は、重要な神々として祀られているのである。

『四時祭式』によると「神八座」として祀られている神々は

「神魂・高御魂・生魂・足魂・魂留魂・大宮女・御膳魂・辭代主」

という八神であり、宮廷鎮魂祭における祭祀の主体はというとまさにこの「神八座」の神々であった。この「神八座」とは、神祇官御巫のまつる〈神殿〉で天皇を守護する神として最も重んじられている神々であり、この鎮魂祭のみならず、祈年祭・月次祭などにおいても祝詞に登場する神である。例えば、祈年祭祝詞には、次のように現れる。

「大御巫の辞をへまつる、皇神等の前に白さく、神魂・高御魂・生魂・足魂・玉留魂・大宮のめ・大御膳神・辭代主と、御名は白して、辭をへつらば、皇御孫の命の御世を手長の御世と、堅磐に常磐に斎ひまつり、……」

ここには「ムスヒ」の五神がみられるが、「生魂」⁽¹³⁾とは生氣のあるムスヒ、「足魂」とは、充実したムスヒ、「玉留魂」とは人の靈魂を留めしずめるムスヒであるという。その他の神々「大宮のめ・大御膳神・辭代主」⁽¹⁴⁾と共に、ここに登場する神々は、天皇を守護する神々であるといわれるが、この神々のなかに天照大神がいないことは、やはり注目されるべきだろう。鎮魂祭の翌日の新嘗祭（大嘗祭）に天照大神がまつられているか否かについても議論があるが、ここでは、

この「神八座」のうちの五座までが、ムスヒの神であることに注目したい。つまり、鎮魂祭のみならず、祝詞における神々の中心は「生成」の神が占めていることがわかる。

新嘗祭とは、この、二月に行われる「祈年祭」と対応するもので、この年頭に行われる「米穀の豊饒を祈念する農耕祭祀」がいわば神への「願かけ」であるなら、十一月の「新嘗祭」とは、「願ほどき」ということになるらしいが、その新嘗祭の一環として行われるのが、鎮魂祭であり、そこで最も重要な神が、このムスヒの神ということになる。

ところで、宮廷鎮魂祭の目的は何か。その祭式の次第は「貞観儀式」「延喜式」「北山抄」に詳しいが、その平安朝の儀式の要点のみを次に記してみる。

琴・笛にあわせて、神部と雅楽寮の歌人の歌各々二声。神部の手の拍子にあわせて御巫が舞い、ウケフネをふせてその上に立って梓でそれを突く。女蔵人がその音にあわせて、天皇の衣を入れた筥をゆする。神祇伯が木綿(御玉緒)を結ぶ。(これを十回繰り返す)。

といった内容であるが、その中心は、衣を入れた筥をゆすること、木綿を結ぶことであつたようで、鎮魂祭は天皇の靈魂を緒に結ぶことに主眼があつたとするのが井口氏であり、靈魂を人体にムスビつけると人の生命が始動するとい(16)う。すなわち、このタマフリとしての鎮魂祭もまた、その祭祀の主体は「ムスヒ」の神であつたのである。

古代における最大の祭りが新嘗祭であつたといわれるが、高天原の祭式も、そうした祭式を生み出す心意と無関係ではないはずで、その祭式を古事記の論理に即して読むなら、日神・天照大神の岩戸隠れの神話における祭神、すなわち、万物生成の神としての高御産巢日神の存在を忘れてはならないはずである。

五 おわりに

古事記冒頭に記される「隠り身」としての高御産巢日神は、以上のように、生成力の根源にかかわる神として、大きな存在であつた。

荒ぶる神としてのスサノヲを恐れて岩屋戸に籠もった天照大神の出現を待って、大がかりな祭儀がとり行われたが、その祈りの対象は、おそらく、高御産巢日神と観念されていたに違いない。迎えられた神は宇受売によりつき、神がかりの状態になるが、この祭式の中心的役割は、もちろんこの宇受売の鎮魂にあるといえる。神話の文脈のなかでは、その神がかりと、「わざをぎ」がもたらした八百万の神々の笑いが、天照大神を動かす、その出現に結びついていくわけだが、この天照大神復活・再生の根源には、「ムスヒ」の神の存在があったことを忘れてはならないはずである。

この高天原の巫女神・宇受売については、他方猿女君の祖神としても複雑な役割を担っており、そのことと合わせて別稿で詳述する予定である。

注

- (1) 松村武雄『日本神話の研究』第三巻。
- (2) 西郷信綱『古事記注釈』
- (3) 岩田 勝『神楽新考』より引用。
- (4) 齊藤英喜「天照大神崇神伝承」(『供儀の深層へ』史層を掘る第4巻)など。
- (5) 土橋 寛『古代歌謡と儀礼の研究』
- (6) 工藤 隆『日本芸能の始原的研究』
- (7) 『古事記注釈』第一巻
- (8) 金井清一「身を隠したまふ神」(『古典と現代』五三)
- (9) 注(7)に同じ。
- (10) 神野志隆光『古事記注解2』。氏は「ひそめられて、その働きによって神々の世界の存立と展開を支えるという根源のもの」という。なお、次のような諸説をあげて検討している。
 - ① ムスヒ生成、ヒヒ靈力(宣長・西郷・思想体系)
 - ② 四段動詞ムスフの連用系ムスヒ(倉野)
 - ③ ウムス(炊く)、ヒ(靈力)(中村「古事記年報」二十二)

- (11) 真弓常忠氏は、高御魂命と天照大神の関係を宮中祭祀と関連づけて、次のようにいう。「顕斎」における高皇産靈尊、神武天皇、嚴媛の関係は、神宮神嘗祭における高皇産靈尊、天照大神、斎王の関係であり、宮中祭祀における高皇産靈尊、天照大神、天皇の関係と等しい。斎王なり、嚴媛なりは要するに天照大神の御杖代であるとともに、高皇産靈尊を祭る巫女の役割を果たすわけであるが、斎王が天皇に代って奉仕されると同様に、道臣命が斎王にあたる嚴媛となり、嚴媛が天皇に代わって奉仕したのである（『日本古代祭祀の研究』）。
- (12) 『古代王権の祭祀と神話』
- (13) 日本古典文学体系『祝詞』の注による。
- (14) 大宮のめⅡ皇居の平安を守る神。大御膳魂Ⅱ天皇の食事をつかさどる神。辭代主Ⅱ神のお告げをつかさどる神（注（13）に同じ）。
- (15) 齊藤英喜『アマテラスの深みへ』
- (16) 鎮魂祭については土橋寛『古代歌謡と儀礼の研究』に詳しいが、最近では井口樹生「神代と人倫」（『古事記 日本書紀 風土記』古代文学講座）が、とりあげ鎮魂祭の意味を述べつつ、古事記冒頭にムスビの神を取りあげたのは、生命体の発生に不可欠のものであるからとしている。